



# 第36回日本認知症学会学術集会 ランチョンセミナー 12



2017年11月25日(土) 13:00～13:45

第6会場 3F 瑞雲 ANAクラウンプラザホテル金沢  
石川県金沢市昭和町16-3

## BPSD様症状に対して 効果が期待出来る漢方薬について



座長

東京大学大学院医学系研究科  
加齢医学講座 教授

秋下 雅弘 先生



講師

大阪大学大学院医学系研究科精神医学教室  
医学部講師

田上 真次 先生

※本セミナーは整理券制です。

配布時間 11/25(土) 7:30～11:00

配布場所 石川県立音楽堂 1F エントランス

- ・整理券の配布はお一人様1枚とさせていただきます。定員になり次第、配布を終了いたします。上記配布時間終了後に残券がある場合は、各会場前にて配布いたしますので共催社スタッフまでお声掛けください。
- ・整理券取得時には参加証のご提示をお願いいたします。
- ・整理券はセミナー開始5分後をもって無効となります。

# BPSD様症状に対して効果が期待出来る漢方薬について

大阪大学大学院医学系研究科精神医学教室 医学部講師 田上真次



認知症患者数の増大に伴い、その中核症状に対する加療のみならず、易怒性や興奮といったBPSD陽性症状、無為・無気力といったBPSD陰性症状に対処を迫られる場面が益々増大している。これらBPSD症状は患者のADL低下だけではなく、介護者にとっても大きな負担となる。これらを改善するためには、まずは環境調整や生活・概日リズム調整などが第一選択であるが、効果が不十分である場合は向精神薬が導入されることが多い。まずは過鎮静による転倒・骨折や認知機能低下のリスクが比較的低いとされているメラトニン受容体アゴニストであるラメルテオンやオレキシン受容体拮抗薬であるスボレキサントが使用されることが多い。しかしながらBPSD症状が強い場合は、抗精神病薬の導入がやむを得ない場合がある。脳移行性に優れた抗精神病薬の効果は大きい、上述したリスクも否めない。このような現況下で近年、認知症のBPSD症状に対して、抑肝散・抑肝散加陳皮半夏などが広く用いられ、その有効性と安全性が評価されつつある。これらは即ちラメルテオンやスボレキサントと抗精神病薬の間に位置するものとして認識されつつある。

本セミナーではまず、抑肝散だけではなく、抑肝散加陳皮半夏もBPSD症状の改善に有用であることを示唆する最近のスタディについて述べたい。また両者の使い分け、これらの効果が乏しい場合の次の一手、およびこれらによって低カリウム血症や浮腫が生じた場合の変薬についても解説したい。さらに最近のトピックスとして、無為・無気力といったBPSD陰性症状にも効果が期待できる人参養榮湯などについても言及したい。日常の臨床現場で苦労されている先生方に、保険適用が可能な漢方製剤の中でおよそ10製剤を簡便に使い分け、よりマイルドな方法でBPSD症状の改善を図る方法を提示していきたい。

また、時間が許す範囲で我々の直近の研究成果、“Semagacestat Is a Pseudo-Inhibitor of  $\gamma$ -Secretase.” (Cell Rep. 2017 Oct.) について言及したい。

## 略歴

1996年	大阪大学医学部卒業
2001年	大阪大学大学院医学系研究科博士課程修了
2001～3年	ベルランド総合病院神経科
2003年～	大阪大学大学院医学系研究科精神医学教室 助教
2009年～	大阪大学大学院医学系研究科精神医学教室 医学部講師